

第 57 回国際宇宙会議 (IAC) バレンシア大会の参加結果について

平成 18 年 10 月 11 日
宇宙航空研究開発機構
理事 樋口 清司

1. 国際宇宙会議 (IAC) の概要

国際宇宙会議 (International Astronautical Congress: IAC) は、国際宇宙連盟 (International Astronautical Federation: IAF)、国際宇宙アカデミー (International Academy of Astronautics: IAA)、国際宇宙法学会 (International Institute of Space Law: IISL) の共催で毎年秋季に開催。

世界の宇宙関係機関や企業、大学等の関係者が参加し、各国・機関の宇宙開発計画、学術研究成果の発表の場として、学生や展示参加を含め、全世界から 2,000 名規模の参加を得る、名実共に世界最大の宇宙関連会議となっている。

多数の役職員が上記 3 学会の個人会員であると同時に、JAXA は IAF の法人会員。(IAA は法人会員登録手続き中。)

2. 第 57 回国際宇宙会議 (IAC) バレンシア大会の概要

期間: 平成 18 年 10 月 2 日 (月) ~ 6 日 (金) (5 日間)

メイン会場: The City of Arts and Science (スペイン・バレンシア市)

テーマ: 「Bringing Space Closer To People」

3. 主な結果

プレナリイイベント

a. 理事長登壇の宇宙機関長パネル

10 月 2 日 (月) に「Heads of Agencies-現行プログラムと将来のプラン」をテーマに開催。ESA、NASA、FSA、ISRO、CSA、JAXA の機関長と CNSA の国際部長より、各々の活動状況及び今後の計画について発表があった。主な発言概要は以下のとおり。

- ・ ESA ドーダン長官: 宇宙探査においても欧州はリーダであるべきであり、そのためのイニシアティブの一つとして協力モデルの検討作業を主導している。他方、災害管理や環境問題への対応として宇宙利用を展開していくため、先ずはユーザや市民の要望に耳を傾けていくことが必要。
- ・ 米 NASA グリフィン長官: この一年プログラムの変更を何も行わなかつ

たということがいい報告。月探査衛星を打ち上げる日、中、印、米の間でデータベースのフォーマット共通化等の協力ができるのではないかと考える。

- ・ 露ペルミノフ長官:連邦宇宙10ヶ年計画(2006-2015)を制定。将来有人宇宙システムの検討についてはESAを主要なパートナーとして国際協力を実施。
- ・ ISROナヤ総裁:宇宙利用に重点的に取り組んでいる。宇宙探査について国内議論中ではあるが「有人」が必要との考え。X線天文衛星Astro-Satでは国際協力を展開予定。
- ・ CNSA張国際部長:衛星利用に関して試験段階から本格的運用段階に移行していく。宇宙科学と探査にも取り組んでいく。
- ・ JAXA 立川理事長:災害管理や環境問題に対応する新たな宇宙利用と知の創造に貢献する宇宙科学分野におけるJAXAの最近の活動状況及び将来計画を中心に紹介を行った。

b.堀川理事登壇の地球観測パネル

日 時:10月3日(火) 9:00-10:00

テーマ:地球監視システムの現状について

概要:ECの進行により、JAXA、ESA、ROSCOSMOS、CEOS及びNOAAから、各10分ずつ、それぞれの活動内容についてプレゼンテーションが行われた。政治的サポート、ユーザからのサポート、継続的活動及び統合された地球観測システムの重要性について確認された。

c.樋口理事登壇の探査パネル

日 時:10月4日(水) 14:20-15:20

テーマ:Mapping the Journey:各機関の宇宙探査戦略について

概要:ASIの進行により、CNSA、ESA、ISRO、JAXA、NASA、ROSCOSMOSから、各5分ずつ、それぞれの宇宙探査に係る戦略についてプレゼンテーションが行われた。会場からの、国際協力の状況に関する質問に対し、ESAより枠組みの議論と並行して、具体的アーキテクチャー及びキー・エレメントの議論をまさに始めようとしている旨説明が行われた。

展示(広報部)

- ・ JAXAブースを開設し、ALOS・はやぶさ・SST模型及びH-Aロケット・M-V-5ロケット模型を展示した。

- ・ JAXA ブースには、5 日間の会期中、約 2,000 人の来場者があった。特に開催初日には、バレンシア市長等 650 人もの来場者があった。また、現地メディアの取材等にも対応した。

学生派遣等の教育活動

- ・ ESA、NASA、CSA の教育担当部と共に IAC 学生参加プログラムを共催し、学生 18 名を日本から派遣。
- ・ 「万人のための有人宇宙探査教育」をテーマとした CSIS、UNESCO、IAF 共催、国連宇宙部協賛のワークショップに参加。
- ・ 国際宇宙教育会議 (ISEB) 年次総会及び第 6 回 ISEB メンバー機関代表分科会に参加。6 件の共同プロジェクト提案の実施を ISEB が承認。
- ・ 10 月 5 日 (木)、バレンシア市内の小中学校対象に、JAXA 派遣学生による水ロケット製作・打上げ体験ワークショップを開催。
- ・ 10 月 7 日 (土) バレンシア大学で開催の ESA 主催の CanSat デモンストレーションに参加し、日本人学生 2 名による CanSat とローバーのデモンストレーションを支援。

第 15 回国際宇宙法模擬裁判

国際宇宙法模擬裁判 (Manfred Lachs Space Law Moot Court) は、1992 年 (アジア地区の参加実現は 2000 年) より、国際宇宙法学会 (IISL) が運営。米国、欧州、アジア・太平洋の 3 地域予選を勝ち抜いた学生による最終戦が IAC 期間中に開かれ、国際司法裁判所判事により審査が行われている。今年は、バレンシア最高裁判所にて、リモートセンシング衛星画像利用と損害の発生を想定した事例が競われ、アジア・太平洋代表のオークランド大学 (NZ) が優勝した。

なお、4 月に行われた地域予選では、北米 10 大学、ヨーロッパ 6 大学、アジア・太平洋からは日本の 5 大学を含む 40 大学が参加。NASA、ESA、JAXA が各地域代表学生の IAC 派遣に財政的支援を行っている。

第 16 回 UN/IAF ワークショップ

国際連合 (UN) と IAF の共催により、主に途上国に対する宇宙技術の普及を目的として例年開催。本年は 9 月 29 日、30 日に開催された。

テーマは、「水資源管理のための宇宙技術の利用について」。主に、アジア、アフリカ、南米の国々を中心に、各国における宇宙技術を利用した水資源管理への取り組みの現状についてプレゼンテーションが行われ、

JAXA からも、センチネル・アジア・プロジェクトなど、日本における取り組みの現状について紹介を行った。

ワーキンググループ(技術 WG 及び教育 WG)においては、技術的先進国と後進国との間のより一層の協力強化の必要性及び各国における政策決定者への働きかけの重要性などについて議論が行われた。

学術セッション

宇宙工学、宇宙科学、宇宙法等多岐にわたる分野の学術セッションが行われ、JAXA からも多数の発表を行った。

その他

2009 年の開催誘致コンペがあり、韓国デジョン市に決定した。
(2007 年は印、2008 年は英国)

3. 所感:

・IAC 会合には、今回も世界の宇宙開発をリードする NASA、FSA、ESA、JAXA、ISRO、ASI、CNES、DLR 等の宇宙開発機関のトップが参加しており、年に一度世界の宇宙コミュニティが顔を揃え活動状況の発表や意見交換を行う機会として定着した感。

・次回第 58 回 IAC 会合をホストするインド、2009 年の第 60 回会合の誘致活動を大々的に展開した韓国、参加者を増やしテクニカル・セッションでの発表にも力を入れた中国等、近年アジアの主要国が IAC 会合の場でその存在感を大きくしてきている。

・日本のプレゼンスについては、将来展望において、若手職員がこうした機会をより積極的に捉えて切磋琢磨し、成長の場とし続けることが必要と考える。

以上